

# 令和5年度経済学部学生チャレンジプロジェクト事業成果報告書

## 竹あかりでまちとつながりを照らすプロジェクト

代表 石村 英理（経済学科 2年生）

### (1) 目的と概要

〈目的〉竹あかりイベントを実施することで、多度津町のシンボルである桜川の活性化や町の賑わいを創出することを目的とした。また、現在日本では放置竹林が社会問題として話題となっている。よって、このプロジェクトで竹を利用することによる地域の放置竹林問題の改善、また、多度津町民と一緒にワークショップを行うことで、地域住民と私たち大学生間のコミュニケーションの場をつくり、交流を深めること。さらに、SNSを使った広報活動により、地域住民だけではなく地域外の人々も集客し、多度津町の認知度を高め、まちに興味、関心を持ってもらうことを目的とした。

〈概要〉多度津町に地域住民と制作した竹あかりを設置する。竹あかり制作におけるワークショップを地域住民参加型にすることで、地域住民と私たち大学生のコミュニケーションの活性化を図った。また、竹あかりの設置後には、SNSによる広報活動を積極的に行い、私たちの活動拠点である多度津町を、ワークショップ参加者だけではなく、その他の多度津町内外の人々も集まる、コミュニケーションが生まれる場所にするために活動した。さらに、一連の活動に付随して、多度津町を代表する歴史的建造物である合田邸の整備についても、地域住民と協力して行った。

### (2) 実施期間

令和4年7月1日～令和5年3月31日

### (3) 成果の内容

#### 1) このプロジェクトの具体的な成果

このプロジェクトでは、主に4つのことに取り組んだ。まず、多度津町にある放置竹林において竹を伐採しそれを節ごとに切り分ける作業、竹にドリルで穴をあける作業、ワークショップ、そして竹あかりの展示である。

まず、一つ目の竹の伐採と切り分け作業は9月に行った。多度津町民に竹あかりプロジェクトについてお話ししたところ、多度津にある放置竹林の手入れをしてほしいという依頼があり、町民の方々にもお手伝いしていただきながら竹の伐採を行った。竹の切り出し、節ごとに分ける作業を行い、竹筒約180本を作成した。以下、作業の様子の写真である。



次に、2つ目の、ドリルで竹に穴をあける作業について述べる。まず大学にて、プロジェクトメンバー全員が試作を行った。そして、他のプロジェクトの方々に声掛けをし、一緒に竹あかりの作成作業を行った。他のプロジェクトの方々と交流できる良い機会となった。

3つ目のワークショップについては、9月17,18日に多度津小学校にて竹あかりワークショップを実施した。ワークショップの参加者については、当初小学生の親子での参加を予定していたが、高校生や大人の方からも参加希望があったため、対象を広げて高校生、大人の方にも募集をかけ、両日で合計35組の参加があった。ワークショップの内容としては、参加者に絵柄の型紙を選ぶか、竹にチョークで好きな絵を書いてもらい、ドリルで穴をあけてもらうというものだった。ワークショップの開催前には、竹あかりの作成手順やドリルを使う際の注意事項などを記した用紙の準備やアンケートシートの作成などを行った。当日は、参加者一組につき大学生が一人付き作業を行った。ワークショップ後にはアンケートに回答をしてもらった。アンケートは、小学生向けと高校生向けの2種類を用意した。以下は小学生向けのアンケート内容と結果である。

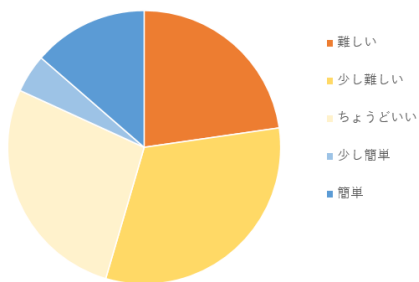


図1. 竹あかり作成は難しかったかどうか

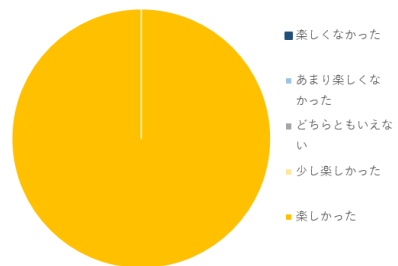


図2. 楽しかったかどうか

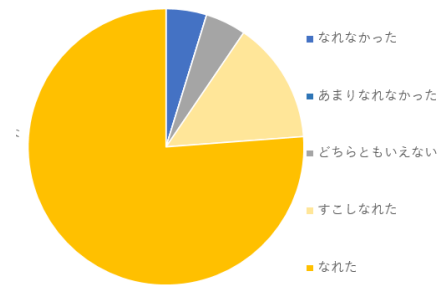


図 3. 大学生と仲良くなれたかどうか

「竹あかり作成は難しかったかどうか」という質問に対しては、難しい、少し難しいという回答が過半数を占めていた（図 1）。また、「楽しかったか」、「大学生と仲良くなれたか」という質問に対しては、楽しかった、仲良くなれたという好印象の回答が大半を占めていた（図 2 ならびに図 3）。

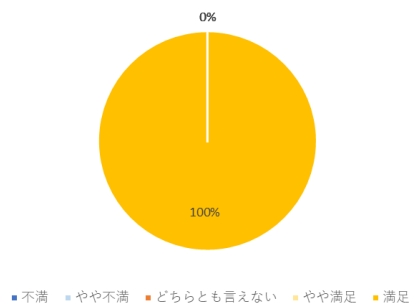


図 4. ワークショップの満足度はいかがでしたか？

次に、高校生向けのアンケート結果についてである。高校生からは 8 名の参加があったが、全員満足という回答だった（図 4）。小学生と高校生のアンケートより、満足度の高いワークショップとなったことが分かる。以下、ワークショップ開催の様子の写真である。



最後に4つ目の竹あかりの展示についてである。11月5日および12日に桜川脇遊歩道にて、多度津アートフェスティバルの関連事業として「竹あかり〜たどつの灯〜」を開催した。このイベント開催に向けて、チラシの作成やSNSへの発信、ワークショップ参加者へのリマインドを行い、イベントへの来場を促した。また、竹あかりロードマップやアンケートシートを作成し、今後の竹あかりイベントに活かせるご意見を回収した。11月5日には四国新聞に取材していただき、後日掲載された。

以下、アンケート内容と結果である。回答者数は11月5日が23名、11月12日が52名の計75名であった。

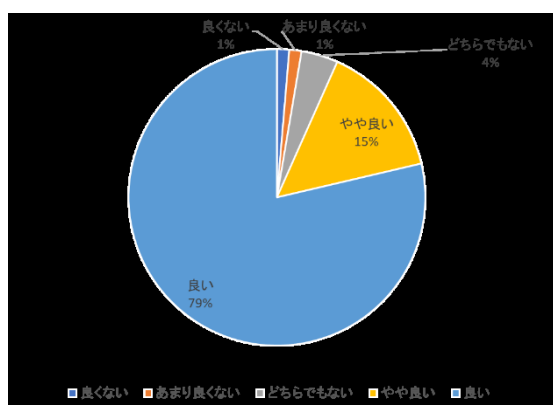


図5. 竹あかりイベントをどう思うか

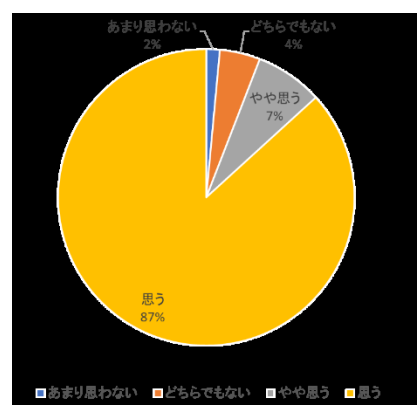
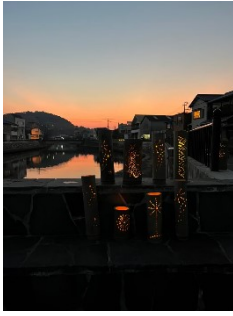


図6. またイベントにきたいと思うか

「竹あかりイベントをどう思うか」では良いが79% (図5)、「またイベントにきたいか」という質問では思うが89% (図6) というように、かなり満足度が高いイベントであったことが分かる。11月5日の竹あかりイベントでは、LEDライトの光量が思っていたよりも弱く、改善が必要だと感じた。そのため、12日の竹あかりイベントの開催に向けて、LEDライトの追加購入や竹筒の下の方に穴を空けるなどの改善を行った。当日は、竹筒に水を入れたペットボトルを入れるなどの工夫を行った。それにより、アンケートの自由記述欄に「先週よりも光量が各段にあがりとても感動した」という意見が多く上がるようになった。

竹あかりは後日多度津港や桃陵公園で開催された「桜たんページェント」にて展示をおこなった。春にも展示を行う予定にしている。また、竹あかりイベントを開催したまちのシンボルである桜川の清掃活動を多度津町の方々と合同で行った。この活動も継続的に行っていきたいと考えている。以下、竹あかり展示の様子の写真である。



## 2) このプロジェクトが大学や地域社会の活性化、学業の振興等に対してもたらした影響あるいは効果

地域住民と交流をもち、関係を築きながら、実際に地域で学生が主体となりプロジェクトを行うことで、香川大学の掲げる「地域に根差した学生中心の大学」という理念について、社会に認識してもらうことにつながったと考えられる。また、地域活性化に興味を持った行動力のある学生が多く在籍する大学というイメージを地域住民に持ってもらうことができた。さらに、地域と大学の関わりを深めることにもつながった。実際に、多度津町民から、私たちに協力のご依頼などをいただく機会が増えた。地域社会の活性化については、竹あかりづくりのワークショップが地域住民同士、また、地域住民と大学生間のコミュニケーションの場となり、人々の繋がりを生み出すことが出来た。また、多度津町のシンボルである桜川に竹あかりを設置することで、町全体の活気を創り出すことに繋がったと考えられる。さらに、チラシやマップを作成することでデザインや構成を考える力が身についた。また、学外の方々とやり取りをする機会が多かったことから、社会人として必要となるマナーの学習の機会にもなった。

### (4) プロジェクトから学んだこと

竹あかりイベントを開催するにあたり、子供から大人、ご高齢の方まで幅広い年代の方々との関りが増え、社交性やコミュニケーション能力が身につき、積極的に行動できる部分も増えた。また、竹あかり制作の際に、ドリルなどの工具を使用したため安全性に配慮する危機管理能力も身についた。プロジェクト全体では、プロジェクトメンバーと協力してイベントを考案し、つくりあげていくことで、協調性を学ぶと同時に発想力、リサーチ能力も身についた。その他にも、SNS 活動やチラシ、ワークシート作成を行うことでデザインの工夫方

法や客観的な視点で考える力も学んだ。

(5) 実施メンバー

代表	2年	経済学部	石村英理
	2年	経済学部	石原優希
	2年	経済学部	田中音羽
	2年	経済学部	小笠原史織
	2年	経済学部	三宅雛菜
	2年	経済学部	山口真央
	2年	経済学部	有本芽衣
	2年	経済学部	佐々木遥
	2年	経済学部	森向日葵
	2年	経済学部	久米井美子
	2年	創造工学部	前川宏太
	2年	創造工学部	安田裕亮
	1年	経済学部	入口莉帆
	1年	経済学部	松本奈珠
	1年	経済学部	石井心
	1年	経済学部	田中蓮太郎